

僕は、
字が読めない。(1)

小菅宏

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

序章

南雲明彦の告白

カミングアウト

「ディスレクシア」と知った日

一九八四年生まれ、現在二十四歳の南雲明彦なぐもあきひこが、自分が「LD（学習障害）」の一種に属する「ディスレクシア」であることを知ったのは、長い錯誤と差別を経た後の二十一歳のときで、しかも偶然の機会にだった。

「ディスレクシア」なんて、そのときまで一度も聞いたことがない言葉だったので、最初は、えっ、何それ？ って感じでした。自分の脳や神経系に機能不全があるなんて、それまで考えてもいませんでしたし、それまで何度も精神科や心療内科でカウンセリングを受け、二度も精神病棟に入院したのに、なぜどのお医者も診断をしてくれなかったのかって、いう気持ちがありました。

「ディスレクシア」とは、すでに述べたように日本では「難読症」、あるいは「失読症」「読字障害」とも訳される。

南雲は相手が話す内容を聞き分ける能力には不自由しないし、会話しているだけでは彼がこの障害の持ち主であることはすぐに察せられない。しかし、耳で聞いたことを文字にして書き写したり、あるいは黒板に記された文字を読んだりしようとすると、そこに大変な努力を必要

とする。

それに加えて、南雲の場合、短い間に複数の用件を受けると、最初の用向きを忘れてしまう、「短期記憶」の弱さという症状も持っている。これもディスレクシアに珍しくない症状だと言
う。

二十一歳になった南雲が自分が「LD」であると知るまでの日々、つまり、文字の読み書き
がなぜできないのかと苦しんでいた十代の頃、特に十七歳になる直前の十一月から十八歳の四
月頃まで、南雲の思春期は暴力と自己嫌悪、家族との軋轢あつれき、二度の自殺未遂と自傷行為の繰り返
返しの日々だった。

この苦しみを何とか治したいと自発的に精神科の病院へ入院したのですが、あの当時は
誰も僕がLDであることを教えてくれませんでした。もっと早く、自分がLD、それもデ
イスレクシアであると知らせてもらえたら、という気持ちは今でも僕の胸の内に渦巻きま
す。しかし次第にLDやディスレクシアの实情を知ることになって、当時の僕と同じように原
因が曖昧あいまいなまま苦しみと闘っている人たちの、何かの助けになれないか、と思うようにな
りました。

LDをめぐる歴史を語るときに、一九六三年、米国イリノイ州シカゴのイリノイ大学障害児研究施設で開かれた、『親と専門家によるシカゴ大会』（知覚障害児基金主催）は画期的な意味を持つ。

その大会の講演で、知的障害児早期教育提唱者として名高いサミュエル・カーク博士が、『Learning Disabilities (LD)』の概念を発表したことを端緒に、米国LD協会(LDA)の前身となる米国LD児協会(ACLD)が設けられて、LD児に対する公的教育が行われる出発点になったからだ。言うなれば、一九六三年は米国における「LD元年」なのである。

しかし、こうしたアメリカでの動きに対して、日本の文部省（現在の文部科学省）が全米合同委員会（LDに関係する米国の八団体で構成されている）の定義を基本に、LDの定義をしたのは一九九九年七月のこと。米国からは三十六年の遅れがある。南雲が長い間、自らがLDであるとは知らなかったのは無理もない、とも言えなくはない。

それはさておき、この文科省の定義によれば、

「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。」

学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚

障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」

ということになる（学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議「学習障害児に対する指導について」）。

文科省の定義によれば、LDは「学力の困難」、「言葉の困難」、「社会性の困難」、「運動の困難」、「行動の困難」の五つの困難を持つ子どもを対象にするが、なかでも、読む・書く・計算するという「学力の困難」がLDの中心的な症状だと言われ、「学力の困難」に限って「Learning Disorders（LD）」と呼ぶ。

学習障害 Learning Disabilities も学力の困難 Learning Disorders も、ともに略称はLDであり、前者の Disabilities は無能力・虚弱・障害などの意味を持つが、Disorders には無秩序のほかに、混乱の意味合いがある。知能指数は標準以上でありながら、「学力の困難」であるLDを持つ子どもたちは「なぜ、僕は他の人と同じ状況で勉強ができないのだろう」と心の中に混乱、混沌を抱いてしまう。南雲の場合も、まさにそうであった。

二〇〇六年夏・七月のその日

二〇〇六年（平成十八年）、東京の梅雨入りは六月九日であり、梅雨明けは平年並みの七月

十八日という予報だったが、南雲明彦が六本木を目指した当日は、灰色の雲が都会の空を覆っていた。

その頃の僕はバイト経験などの相次ぐ失敗（後述）から、一人で生きていくことに多少は心細くは思うようになっていました。しかし——ちよつと大げさな言い方ですが——、そんな自分でも少しは社会貢献ができないかという気持ち捨てられなかつたのです。そこで六本木の、あるNPO法人を紹介してもらつて、そこでボランティアの仕事をしうと考えたのでした。

その時期は、言つてみれば、心の中央に空洞を抱えて過ごしていて、未来に希望が持てない状態でした。そこで、ボランティアとしての仕事を得ることで、明日へと繋つなごうと思つたのです。

僕は小学生の頃から、書籍や雑誌を読むのに肝心の活字が霞かすんでしまい、正確に読解するには通常の何倍も時間を要しましたし、文字を一字書くにも枠内に収め切れずに食はみ出して、歪んでしか書けないという二重三重の状態に苦しめられてきました。

文章全体を見てもボヤケて、活字が滲じんで見えるだけで、何が書いてあるのか解読できません。例えば、僕の故郷新潟の「潟」の文字を読むときは、まず「さんずい（シ）」を

認識して、その次に右側の「つくり（寫）」に注意を移します。そうした作業の後に、脳内で左の部分と右の部分を合体させて「瀉」という漢字を理解します。漢字一字の左側と右側のイメージが合致したときの感覚は、脳の一部にスポットライトが当てられて文字が記号として浮上する、という感触、と表現するとしか僕には言いようがありません。そんなわけですから僕が音読する速度は普通の人の何倍もかかります。音読は文字の読解と読み上げという、二つの脳の機能を同時に要するので、僕にはきわめて困難なのです。

後述するが、「なぜ、自分だけ友だちのように読み書きができないのか」との悩みを、南雲は小学校高学年になってから自覚するようになるものの、中学生の時期までは周囲をごまかして過ごした。だが、受験を控える高校二年の夏前、ついに忍耐の限界を超えてしまう。

失敗ばかりの仕事経験

東京・六本木の華やいだ表通りの町並みから避けるように、その日、僕は交差点近くの細い裏路地に入り込みました。なぜか一瞬、安らいだ気分になったのを憶おぼえています。理由は他人の視線が気にならなくなったからです。僕は今でも見知らぬ人の視線に怯おびえることがありません。それについては別の項目で触れますが、「ディスクレシア」のもたらした

特異な意識に起因する、強迫性障害を僕は持っているのです。

僕は廃校になった校舎を利用した、その時はNPO法人が数多く入っていた建物を目指して六本木に来たのです。

僕の目的とは、そのビルの中に入っていたNPO法人「EDGE」(現在は東京の浜松町に移転)でボランティアの仕事を紹介してもらったことでした。当時の僕は三回にわたる転校を経て、四番目に入った「アットマーク国際高校」の通信制課程を二十歳で卒業した頃だったのですが、同校で知り合った先生がEDGEの存在を教えてくれて、このビルで待ち合わせすることにしたのです。

実は、このEDGEこそ、ディスレクシアの正しい理解と支援を目的とするNPO法人でした。その当時の僕はもちろんディスレクシアなんか知りません。で、EDGE代表の藤堂栄子さんから「ディスレクシアとは何か」の説明を聞いているうちに、「あれ、これって僕の症状じゃないか」とびっくりして……。ボランティアをするつもりでEDGEを訪れたのに、実は僕自身がボランティアを受ける側だって気がついたんです。

「ボランティアをする側ではなく、される側に立っているのだ」という現実を突きつけられた南雲だったが、しかし、それでもなお彼の心から「社会に対して自分は何かできるはずだ」と

いう思いが消えることはなかった。それどころか、「何かがしたい」との感情は以前にもまして強くなったと打ち明ける。さまざまな苦難や絶望を経験したあげくに「受け身で生きるのではなく、他人のために役立つ存在になりたい」という思いが、すでに当時から彼の道しるべになっていたのである。

話はそれますが、このアットマーク国際高校は広域通信制課程・単位制・総合学科という、異色の高校です。普通の学校になじめない学生や高校中退者を受け入れて、自由なカリキュラムで、自主的に学べるシステムの高校です。僕にとっては、四つ目の高校です。最初、地元の進学校新潟県立六日町^{むいかまち}高校に入った僕は、次第に授業に追いつけなくなり、高校二年生の夏に地元の学校をやめて、長岡明德高校の定時制、通信制の中央高等学院に転校します。でも、そこでも違和感を感じた僕がたどりついたのがアットマーク国際高校だったというわけです。

この異色の学校で高校卒業資格を得たものの、南雲の就職は困難を極めた。最初は東京タワー近くのホテルのウェイターに採用されたが、一か月足らずで辞めた。研修中に与えられたノートに上司からの仕事上の注意を時間内に記述できなかったのだ。ノートを提出せよと促され

でもメモ書きさえ成立できない現実には、茫然とする。研修担当の上司は普通で話してくれるのだが、それを規定時間内に正しく綴ることができないのだ。「メモをまともに取れない従業員は要らない」との一言に打ちのめされ、退社することにしたのだ。

さらに南雲個人の私生活での難題があった。日常生活における強迫性障害である。

いわゆる強迫性障害には、「強迫行為」と「強迫観念」の二つの側面があるとされる。南雲の場合、「自分は汚れた存在だ」という強迫観念があり、そこから「自分の手が汚れているのでは」といったん感じると、徹底的に手を洗浄しなくては気持ちの整理がつかないという状況に陥る。一日に何時間も洗いつづけなくては気が治まらなかった。

こうした南雲の「強迫行為」によって、当時の彼の両掌の皮膚は乾燥したまま、指紋が薄くなり、指の関節は目立つほど粗く強張ってしまい、倍くらいに腫れた。現在も当時の痕が掌に残っている。

「自分は汚れている」という強迫

強迫性障害のことを言えば、高校生になり、他人の家を訪ねるときも、なるべく両方の手を使わないように左手の腕に鞆をぶら下げ、その左手でドアのノブを握るようにしました。できるだけ自分の体が汚れないようにするための予防処置のつもりでした。でも、次

第にそうすることも煩わしくなり、外出を避けるようになってしまい、家に閉じこもりがちな生活になりました。

でも、いったん「汚れてしまった」と思いだすと徹底的に洗わないと気持ちが悪く着きませんでした。ですから、もうだいたいじょうぶか、もうこれでだいたいじょうぶかと自己確認を繰り返して、結局は何百回、何千回も洗いつづけなければ気が済まなかったのです。今でもその名残りはありますが、以前とは違い、「この手洗いを済ませれば次のことができる」と思えるようになったので、ずいぶん違います。強迫観念に囚われていた時期は、洗っても洗っても「自分は汚れている」と内向きになってしまい、そのマイナス思考から思うように脱出できませんでした。

「何で自分は汚れているんだ！」と叫んで壁を殴ってしまい、そのことでまた「手が汚れてしまった」と、手洗いを繰り返してしまうこともしばしばでした。

南雲にはこうした「強迫観念」の他に、他人との接触についての「対人恐怖」があった。他人の視線に過剰におびえて自己制御ができなくなり、精神の均衡を崩してしまう事態に陥ってしまうのである。

他人の視線が気になる

用事で外出をするとき、それまでの手順で見落としたことがなかったか、間違ったままにしてこなかったか、何か忘れていないか、と何度も頭のなかで記憶を呼び覚まさないと不安で仕方なく、そのつど、部屋に戻って再確認しないと気持ちが悪ざわわして、パニック状態になることも度々たびたびでした。

そうやってようやく外出して、電車に乗っているときも、他の乗客の視線が怖くてならないのです。自分の姿が「他人と違っているのではないか。もし、そうなら恥はずかずかしい」と自分勝手に妄想して、余計に気分が萎縮いしやくしました。他人の視線から逃げるつもりで、色の濃いサングラスを掛けるのですが、それでも顔を上げられません。うつむいたままで外出するのは、神経を遣つかい、ひどく疲れました。

さらに視覚に関することでは、相手との間合い（遠近感）を素早く適度に判断することができず、そのために日常で失態を演じることを南雲は自覚している。

「忘ける」の汚名

最初に就職したホテルではウエディング係も担当したのですが、式の最中に、お客にワ

インなどを注ぐときに何度もこぼしてしまいました。自分ではマニュアルどおりに注いでいるつもりなのに、お客の服を汚す失敗を何回もしました。上司からは叱られ、同僚からは嫌味を言われ、いたたまれない気持ちになりました。自分では一所懸命に努めているつもりなのに、どうしてこんな簡単なことさえ失敗してしまうのか。正直、まったく訳が分かりませんでした。後になり、ディスレクシアにともなつて適切な空間認知ができない機能不全が自分にあることが分かりましたが、当時は自分自身を責め、悔しく思いました。

それでも南雲は、次に新宿にある英会話スクールの営業の仕事を見つけた。書店などで営業のキャンペーンを張るのが仕事内容で、これならばと内心で多少は自信があった。南雲は「自分の口で言うのも照れますが」と断って、「ありがたいことに、僕は外見で他人に好意を抱かれることが結構多いのです」と打ち明ける。

英会話スクールの社長さんにも最初の面接で気に入ってもらいました。でも、いざ研修に入るとノートにいつさい何もメモができていないのを担当者から叱責しつせきされたことで、営業の現場へ出る前に強迫性障害が出て、辞めるハメになりました。言い訳になりますが、僕としては全身全霊を傾けて、聞いた内容をメモ書きにしていたつもりです。しかし僕が

書き留める速度は普通の人の倍の遅さになってしまいました。

というのも、僕の場合、メモを取るには話している人の口を穴の開くほど見つめなくてはなりません。

その人が何を語っているのかを知り、それを自分なりに解釈して理解するには集中力が必要です。でも相手が左右に動いて、僕の視界から外れるとその人の口元が霞んで見えてくるので、眼で追うのが辛くなってしまうんです。だから、どんなに努めても追いつかないのが現状です。

でも、「ノートが書いていない」ということは「研修を聞いていない証拠」と解釈され、「そういう注意散漫な人間は必要ない」との理由で叱責されました。きちんと書いていないのは「怠けているせいだ」と指摘され、そんな怠慢な人間は営業現場で足手纏あしでまといになるとさえ言われました。

この当時の僕は、まだ自分がディスレクシアであることをまったく知らない時期なので、「どうして、こうなってしまうのか」とへこんでしまいました。この頃、僕自身が障害の実体を知り、それを少しでも周囲の人に理解してもらえれば、このような誤解を受けずに済んだでしょうし、苦しむこともなかったと思います。

デイスレクシアは、ギリシャ語の「dys (困難、できない)」と、「lexia (読む)」に由来するが、同じデイスレクシアであっても、一人一人で症状は違う。例えば、「読み書き」に関して、

- 一・長い文章を一定の速度を保ち、正確に読むのが難しいケース。
- 二・文中の語句を抜かして読み、行を飛ばして読むケース。
- 三・例えば「二七」を「七二」と逆さに読んだりするケース。
- 四・字形を混同して読むケース（「ほり」を「おり」など）。
- 五・字を入れ換えて読むケース（「みたけ」を「みけた」など）。
- 六・意味が似通う漢字（「水」を「氷」など）を読み間違えるケース。

などがあり、ほかに「聞くこと」の錯誤、一度見てもすぐに忘れる「視覚的に短期記憶がよいくないこと」や、聞いてもすぐに忘れる「聴覚的に記憶がよいくないこと」などの特徴がある。デイスレクシアは英語圏やフランス語圏に多く見られるとされる。その要因は、英語などの場合、同じ発音でも綴りが何通りもあることを専門家は指摘する。たとえば「r」の発音にしても、tough のように gh が「r」の音を表す場合もあり、しかも、さらにその gh という綴りが場

合によっては無音であったりするのだから（例 コウゴト）、複雑きわまりない。

これに比べれば現代日本語の表記は「発音どおり」が基本だから、英語やフランス語などに比べれば恵まれる環境にあるといえるが、その一方で数千にも及ぶ漢字があり、しかもそれぞれに音読み、訓読みがある。その点では、英語、フランス語とは別種のむずかしさがあると言える。ちなみに男女比率に関して言えば、日本ではディスレクシアをはじめとするLDは男性のほうが多いと見られているが、その理由は不明である。

「あなたが特別な存在ではない」

あの夏の日（二〇〇六年七月）は梅雨空を見上げながら、わずかな希望を胸に伝つて頼たのって六本木へ向かったのです。この日にボランティアへの具体的な見込みが得られないのであれば、新潟の実家へ帰る覚悟を胸に秘めていました。

当日、アットマーク国際高校で知り合った教師と合流して、NPO法人の団体を訪ねました。その教師から紹介されたのが、先ほども言ったEDGEの藤堂栄子代表でした。藤堂代表は僕の症状を聞いて、

「あなたは『ディスレクシア』ですね」

と、即座に答えました。

(デイスレクシア?)

それまで一度も耳にしたことのない「用語」でした。最初のうちは、僕にはむずかしくて理解不能でしたが、先天性の障害に起因する「読み書き困難」な症状、との説明を懇切丁寧に受けて、次第に気持ちが悪くなるのをふしぎに感じました。そして、藤堂代表から決定的な言葉を聞いたのでした。

「あなただけが特別な存在ではないのです」

NPO法人EDGEは、日本におけるデイスレクシアに対する支援や、正しい知識の普及を目指して二〇〇一年に作られた団体であった。いわば、デイスレクシアの研究と普及の専門家である、藤堂代表のその一言が、それまで南雲が抱えていた得体の知れない心の闇を一条の光で照らした。

南雲は長年、生きることによる不安であり、そのぶん孤独だった。読み書きに関する恐怖心のためだ。読み書きが困難だからといって、生活が著しくむずかしい、というわけではない。しかし、自分以外の人間と同じことが同じようにできない自分を許せず、生きることによる不信感を感じ始めたとき、「他人とは異なる人生」に苛立ちを抱くようになる。

普通になりたい、との願いは絶えず心を苛んだ。少なくとも、隣の人と同じでいたい、と思

つたが長い間、果たせないままになった。

思わぬ場所で初対面の方から、自分がディスレクシアだと理解させてもらったとき、とまどったり、怒ったりするのではなく、「これでやっと救われる」と思えたのが真実です。そのときの解放感かたしやうかんは悪夢から覚めた気分にも似ています。妙な話に聞こえるかもしれませんが、「これでやっと自分にも、ディスレクシアという肩書きかたしやうができた」という安堵感あんどかんがありました。それが率直な感想です。

もちろん、それと分かったところで、その日を境に急に日常生活が変わるということではないのですが、字がスムーズに読めず、字がちゃんと書けないのは僕だけではないんだとの実感が胸の内にあふれました。僕は、あの日、真の意味での社会との連帯意識れんたいいしきを持たんだと思います。六本木での出会いがあつたことで、名無しで孤独な自分に「ディスレクシア」の肩書きが与えられ、居場所ができたこと、気持ちがいぶん楽になりました。

「あなただけが特別な存在ではない」との言葉をかけられた衝撃は、南雲明彦にとって途方もなく画期的だった。

(ほかに多くの人と同じ悩みを抱いて生きている)と、思えることで、それまでの孤立感と

は別次元での、社会との繋がりを意識できるようになった、と理解できる。社会との連帯感とは「人との絆」と言い換えられる。

僕は、字が読めない。 小菅宏著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（税込）
ISBN 978-4-7976-7193-3

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)